伊東静雄　青年期の読書体験

渡部満彦

――創作家に取つて、勉強とか努力とか云ふ事は読書ではない。それは寧ろじつと考へ込む事であり、凝視ることである。しかし其思索と観照とが、読書によつて助けられ補はれねばならぬ事は、また言ふ迄もない――

厨川白村『十字街頭を往く』三一〇～一頁

一

伊東静雄の旧制佐賀高等学校時代の日記が彼の遺児と旧制大阪府立住吉中学の教え子によって編纂され、この（平成一九年）一二月に思潮社から発兌の予定だそうである。伊東の著作といえば、生前の詩集四冊と周知のように桑原武夫の慫慂による京都人文書院の『伊東静雄全集』（以後『全集』と表記）と大塚梓、田中俊廣編『伊東静雄青春書簡――詩人への序奏――』（本多企画、平九、以後『書簡』と表記）で、『全集』と『書簡』に依拠しながら本稿のテーマ「伊東静雄　青年期の読書体験」を考察するわけだが、この未刊の「日記」からどんな伊東静雄の青春と読書のどのような姿が浮かび上がってくるのだろうか、刊行が待たれる。

《青春とは、とほりすぎれば済んでしまふ麻疹ではない。心の美しく健全なひとほど、自己の青春の中に見出した問題から生涯のがれ得ないやうに思はれる。真実な人間とは自己の青春を終へることの出来ない人間だ》といったのは伊藤整（『青春』角川文庫、昭二六、三～四頁）だが、広辞苑五版ＣＤ-ＲＯＭ版によれば、青春とは《①（五行説で春は青にあてる）春。陽春。〈運歩色葉〉、②年の若い時代。人生の春にたとえられる時期。「――時代」「――の思い出」》とあり、語句として【青春期】が記載されている。

念のため【青春期】を検索してみると、【思春期】に同じとあるので、これをたどると、《二次性徴があらわれ、生殖可能となる時期。一一～一二歳から一六～一七歳までぐらいの時期。青春期。としごろ。春機発動期》と説明されている。

一方、青年期は同じ辞書によれば、《男女の一四、五歳から二四、五歳頃までの時期。性的特徴が顕著となり、自我意識が著しく発達する》とある。そこで伊東静雄の青春期を旧制佐賀高等学校入学の一九二三年から一九三〇年、つまり昭和五年、二五歳くらいまでに広げて考えてみたい。奇しくも大塚格への書簡も一九三〇年までが頻繁で、五年後に一通のみが発見されている。

伊東静雄の書簡から読書リストを作成すると左の通りだが、表記は彼の書いたとおりそのままに、『全集』、『書簡』の註から出版社や定価を補った。

大正一二年一一月～一二月　『徒然草』

大正一四年　六月　二日　一茶
九月二二日　トルストイ『我が宗教』
一〇月　五日　ジッケンス『クリスマス・カロル』、森鷗外『舞姫』、桑木厳翼『哲学概論』、岩城準太郎『明治大正の国文学』、厨川白村『十字街道を行く』
一一月　八日　国木田独歩、北村透谷
大正一五年　一月　島崎藤村『新生』、『海へ』
一月一七日　島崎藤村『新生』、『海へ』、『フランス便り』、『桜の実の熟する頃』、『春』
二月　国木田独歩『恋愛日記』
二月一〇日　島崎藤村『春』、ショウペンハウエル『宇宙と人生』
三月　四日　島崎藤村『三人の訪問者』
五月　七日　トルストイ『アンナカレニナ』
五月一五日　カント、出隆『哲学以前』（大村書店、大正一〇年）、三井芳太郎『科学と宗教』（警醒社、大三）
五月二五日　正岡子規、ストリンドヘルヒ
七月　国木田独歩、ゲーテの“Herman と Dorothea”（Hermann und Dorothea）
九月二二日　ルソー『懺悔録』、ホイットマン、滝沢馬琴『日記』
一〇月一八日　トルストイ全集、正岡子規全集、有島武郎『迷路』、ルソー『懺悔録』
昭和　二年　二月　四日　岡田三郎、谷崎潤一郎『潤一郎喜劇集』
六月一〇日　万葉の書写
一一月　前田夕暮『緑草心理』、『梁塵秘抄』、ツルゲーネフ『父と子』
一一月二三日　ルソー『懺悔録』、『万葉集』、『歎異抄』、子規、良寛、荻原井泉水『遍路となりて』
三月二三日　武者小路実篤全集、芥川龍之介全集
三月三一日　藤沢古実『国原』（昭和二年岩波書店、アララギ叢書第三一編）
昭和　三年　六月一四日　正岡子規
六月　七日　『戦旗』
九月一二日　マルクス
一〇月二二日　芥川龍之介全集、蕪村全集
一二月一一日　チェーホフの全集（独逸語）、パルザック、ストリンドヘルヒ、ボードレール、ハウプトマン、ツルゲニエフ、ゴーゴリ、ゴーリキー
一二月一一日　チェーホフ全集、芥川龍之介
一二月二一日　ツルゲニエフ『フリューリンクス・ボーゲン』、ツルゲニエフ『ブーリンとブバリン』（岩波文庫、二〇銭）、有島武郎『宣言一つ』、プロレタリア文学、ツルゲニエフ『フェター・ウント・ゾーネ』
一二月二六日　独逸語によるロシア文学研究
一二月二七日　チエホフ、ツルゲニエフ、有島武郎、芥川龍之介、田辺元「所謂『科学の階級性』に就いて」（『改造』一二巻一号）
昭和　五年　二月一七日　ストリンドベリ、有島武郎『宣言一つ』
三月　一日　モーパッサン『女の一生』
三月　七日　有島武郎、プレハノフ、フリードリッヒ・エンゲルス、堺利彦訳『社会主義の発展』（改造文庫、一〇銭）、中河与一『形式主義芸術論』
三月一七日　ギイ・ド・モウパッサン、J. Renard を世界文学で、パルザック『人間喜劇』、『改造』二月号広津和郎「文芸雑感」、木村毅「大衆文学論」、兼常清佐「音楽の階級性」

四月　七日　トーマス・マン
六月一三日　シュニツレル、ストリンドベリ、岩野泡鳴「毒薬女」
六月一八日　シュニツレル
九月二四日　エドアルト・メリケ『プラーグへの旅路のモーツアルト』
一一月　ルッソーの伝記

広辞苑に「春機発動期」という字句が見られたが、伊東静雄の青年期も不条理な性欲との戦い、生きることの意味の模索であった。伊藤整は次のようにも書いている（前掲書、三頁）。

人の生涯のうち一番美しくあるべき青春の季節は、おのづから最も生きるに難しい季節である。神があらゆる贈り物を一度に人に与へてみて、人を試み、それに圧し潰されぬものを捜さうとでもしてゐるかのやうに、その季節は緑と花の洪水になつて氾濫し、人を溺らせ道を埋めてしまふ。生命を失ふか、真実を失ふかせずにそこを切り抜ける人間は少ないであらう。

静雄の青年期の読書は宗教から哲学へ、哲学から文学へ、そしてそれが京都帝国大学文学部国文科卒業論文『子規の俳論』へと結晶する。静雄が論文作成で引用・参考にした文献は、「芭蕉雑談」、「獺祭書屋俳句帳抄」、『古今集』、『俳諧一葉集』、『去来抄』、『芸術の二道』（長与善郎）、「一茶の俳句を評す」、「俳人蕪村」、『文学論』（夏目漱石）、『笈日記』、『芭蕉雑記』（室生犀星）、『俳句提唱』（荻原井泉水）、明治三二年香取秀真宛書簡、『文学論』（竹友藻風）、「病床六尺」、「明治二十九年の俳句界」、「松蘿玉液」、「俳諧大要」、『俳句の作り方と味はひ方』（荻原井泉水）、「新派俳句の傾向」、『詩の原理』（萩原朔太郎）、「俳句の初歩」、「俳句問答」、「仰臥漫録」、「配合論」であった。

昭和五年には旧制大村中学校の同窓蒲池歓一、福田清人の同人誌『明暗』に参加、五月号に「空の浴槽」を発表、昭和七年六月青木敬麿等と『呂』を創刊、詩人への道を歩み始めるが、書簡、書籍、雑誌で静雄が言及した書物名やその感想を通して静雄の詩作品の内実や詩想、生活の実態を闡明したいという筆者の意図の手はじめとして青年期の読書を見てみよう。

静雄が最初に報知する書物名は『徒然草』で、大塚宛大正一二年一一月あるいは一二月頃と編者が推定する書簡に現われる。つまり、自分の勉強態度は『徒然草』風に記載すれば《いにしへの古きことども書き侍りたる文のいみじう厚うして、夜深くなるに、見あきてきて、文机にかゝりたるままにて、うち伏して、夜半ばかりに目醒め、おどろき、床につきはべりぬ》（『書簡』、一三頁）と戯れている。『徒然草』への静雄の述懐がないので推測の域を出ないが、旧制大村中学の授業で取り上げられたか、あるいは佐賀高等学校受験のために詳解『徒然草』の類に目をとおしていただろうか。

国木田独歩、島崎藤村、有島武郎、岩野泡鳴の名前がリストとされているが、田山花袋が静雄の関心外であったのはなぜなのだろうか。

二

曠野の歌

わが死せむ美しき日のために
連嶺の夢想よ！　汝が白雪を
消さずあれ
息ぐるしい希薄のこれの曠野に
ひと知れぬ泉をすぎ
非時の木の実熟る
隠れたる場しよを過ぎ

われの播種く花のしるし
近づく日わが屍骸を曳かむ馬を
この道標はいざなひ還さむ
あゝかくてわが永久の帰郷を
高貴なる汝が白き光見送り
木の実照り 泉はわらひ……
わが痛き夢よこの時ぞ遂に
休らはむもの！

伊東静雄がいくつかの詩作品の詩想を国内外の絵画や著作から得たということを指摘した一人に小高根二郎がいる。《わが死せむ美しき日のために／連嶺の夢想よ！ 汝が白雪を／消さずあれ》とパセティックに詠い出される、『コギト』昭和一〇年四月号に掲出された「曠野の歌」はイタリアのアルプス風景画家セガンティーニ（Giovanni Segantini, 1858–1899）の油彩画『帰郷（Ritorno al paese natio）』とドイツの抒情詩人メーリケ（Eduard Mörike, 1804–1875）の『プラークへの旅路のモーツアルト（Mozart auf der Reise nach Prag）』末尾のボヘミア民謡としての詩「運命の歌」に奇しき符合が見出せるとする（『詩人伊東静雄』新潮選書、昭四六、一五五～一五九頁）。その根拠を酒井百合子宛書簡に見出している。

手塚富雄はメーリケはドイツ文学中でもっとも純粋な抒情詩人の一人で、同世代の詩人にくらべてとくに時代離れしている感じがあり、在世当時は世に知られていなかったと解説しているが（『ドイツ文学案内』、岩波文庫、昭三八、一八〇～一八一頁）、静雄がメーリケにたいするこのような事柄を知っていたか否かはいま知るよしもないのだが、小高根の石川錬次訳の「運命の歌」を援用しながら奇しき符合が見出せるという言辞に、杉本秀太郎は《メーリケの短篇小説の結尾の詩を『曠野の歌』の典拠とする理由を類似にもとめるのなら、実のところ、類似はどこにもない》（『伊東静雄』近代日本詩人選一八、筑摩書房、昭六〇、五〇頁）と切り捨てる。

麻原雄の「回帰する風景 セガンティーニ」によれば、《愚かれたようにエンガディンの山並みを描き、山襞に織りなす光の意匠に魅せられ、さらなる輝きを求めて山の高みへと登っていった》セガンティーニは《未完の遺作となった「生」「自然」「死」の三部作を描くために、海抜二千七百メートルの高みに画架を立て、死を招いた急の病のもたらす苦痛に堪え画筆を執った》（『イーゼンハイムの火 麻原雄芸術論集』冬花社、平一九、四八頁）。ここはジョヴァンニ・セガティーニをジョヴァンニ・セガンティーニに改名した彼について語る場所ではないが、静雄が「曠野の歌」のモチーフとした「帰郷」は、《マローヤの谷の冬の朝、雪に埋れた小屋から、今まさに一つの遺体が運ばれようとしている。三人の黒衣の女がうなだれて戸口に立ち、葬列というにはあまりに粗末な、骨組だけの馬橇が一台、それを待ち受けている。三部作の中の「死」を、彼はまず描いた。それは、もっとも早く彼の脳裡に描かれていたものだった》（前掲書、五五頁）ろうが、《死の翌日、セガンティーニの遺体は、粗末な馬橇に載せられてシャーフベルグの山を降りた。駆けつけた妻は、その光景が三部作の「死」そのものであったと、驚きとも怖れともつかない調子で語ったという》（同）。

『帰家』とも訳されるセガンティーニの他の作品も見せられた池田勉も次のように書いている（「伊東静雄さんのことども」富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社、昭四六、一二〇～一二一頁）。

私たちは、栗山理一もその一人であったが、詩集『わがひとに与ふる哀歌』の中でことに、「曠野の歌」や「わがひとに与ふる哀歌」の諸篇を愛誦した。崇高清新で若々しい抒情の息吹きが、切なく私たちの胸を満たした。セガンチニの描いた「アルプスの真昼」に、遠く雪の連嶺がそびえ、羊飼ひの木によっていこふ牧場の絵を見ながら、伊東さんはこれらの詩篇のイメージを語って

くれた。

このような所感に対して杉本は《鬼哭啾々たるこの『帰郷』の画面ほど、『曠野の歌』の歌い上げる帰郷から遠いものはない。いかにも、画面は詩のプロットとして活用された。だが、活用は転写ということではない。（略）プロットとして絵画を活用するについても、わが詩人は、このあとで触れるように、『帰郷』の画面ひとつだけを活用するような粗末なまねはしていない》（前掲書、五二頁）と異議を申し立てている。

小高根にたいする杉本のポレミック的発話に筆者は判断を中止するしかないのだが、というのは《わが死せむ美しき日》、《連嶺の夢想よ！汝が白雪を／消さずあれ》、《非時の木の実熟るる／隠れたる場しよ》という詩語に『梁塵秘抄』も反響しているように思うからでもある。

東や香山の山に生るなる
花橘を八房ふさねて
手に取ると夢に見つ

杉本秀太郎も《「非時の木の実」は、柑橘類を指して「ときじくのかくのこのみ」という古い大和言葉を思い出させる。柑橘は夏に結実し、秋、冬を経て春にいたるまで、枝に実をとどめている。けれども、高冷の山地に柑橘はそぐわない》（前掲書、三八頁）という。杉本の見解で筆者の興味をそそるのは、『聖書』の『詩篇』との交響への言及である。筆者にはセガンティーニ、メーリケ、聖書詩篇、梁塵秘抄という絡み合った糸をほぐして諒解するにはいま少し時間が必要である。ただ伊東静雄の青年期を「生」「自然」「死」、それに〝痛き夢〟が領有していただろうことは想像できる。

三

秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る

秧鶏のゆく道の上に
匂ひのいい朝風は要らない
レース雲もいらない

霧がためらつてゐるので
厨房のやうに温くいことが知れた
栗の矮林を宿にした夜は
反落葉にたまつた美しい露を
秧鶏はね酒にして呑んでしまふ
波のとほい　白つぽい湖辺で
そ処がいかにもアット・ホームな雁と
道づれになるのを秧鶏は好かない
強ひるやうに哀れげな昔語は
ちぐはぐな合槌できくのは骨折れるので

まもなく秧鶏は僕の庭にくるだらう
そして　この伝記作者を残して
来るときのやうに去るだらう

『四季』昭和一〇年四月号に発表され、第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』一七番目に収載された「秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る」の詩想はチェーホフの書簡集から取材されたと指摘したのはこれも小高根二郎が最初だろうか。この詩は内山賢次訳『チェーホフ書簡集』昭和四年八月刊行改造文庫の中のプレスチェーイェフ宛の書簡による

という（前掲書、八九～九一頁）。

小高根二郎は次のように書く、《若い静雄はこの二人（芥川龍之介と有島武郎―引用者註）の先輩が脱却できなかった個人主義の限界を、なんとかして突き抜けようとして焦っているのは事実である。そんな心境にある静雄は、たまたま改造文庫『チェーホフ書簡集』（昭和四年八月刊内山賢次訳）の巻末付録でマキシム・ゴーリキーの「アントン・チェーホフ――追憶の断片」を読んで無上の感動をしたのであった》（八九頁）。《静雄のチェーホフに寄せる満悦と同感は、その日から五年後、『チェーホフ書簡集』中の一書簡――プレスチェーイェフ宛の文章に取材して、「秧鶏（くいな）は飛ばずに全路を歩いて来る」に結晶するので、特に記憶に留めておく必要がある》（九一頁）と。

これにたいして杉本秀太郎は「秧鶏（くいな）は飛ばずに全路を歩いて来る」はゲーテに倣った寓意の詩で、《昭和初期の我国でゲーテをあげつらっていた人たちの俗物性が、ゲーテを味読していることの告白を伊東静雄に許さなかった》結果だとする（前掲書、二〇六頁）。しかし、小高根の発見は認めながらも次のように分析する。

> これを読むと（『チェホフ書簡集』の該当箇所―引用者註）、伊東静雄は表題に用いた字句だけをチェーホフ書簡の文脈から荷抜きの要領で盗んだことが分かる。寓意の展開は、チェーホフ書簡には見られぬ文脈でおこなわれているのだから。別の文脈のなかで秧鶏が「飛ばずに全路を歩いて来る」。この盗みもまた詩人の血液中に盗跡をくらましている（二〇九～二一〇頁）。

昭和四年八月二五日発行と奥付にある改造文庫第二部第七一編の内山賢次訳『チエホフ書簡集』定価五〇銭A六判変形はガーネットからの重訳で、一九二九年五月三一日と日付のある「訳者の序文」には、《この本はかなり昔、『チエホフの手紙』といふ標題で、ある本屋から出し、その本屋の没落と共に絶版になつてゐたのを、三年前、春秋社から再刊し、チエホフ愛好者に迎へられてゐたものである。それを実に廉価版にして普及させようといふ改造社の企ては、この訳書に特殊の愛着をもつてゐる私には特別に嬉しい》（五頁）もので、静雄が無上の感動をしたという小高根が踏み込んだ感想を述べた、ゴリキー『追憶断片』は《春秋社版に附したものだが、これもこのまゝ普及版に収録して置く。チエホフの姿を素描的な筆で眼のあたり見るやうに活躍させてゐるゴリキーの小憎らしいほどの鋭い観察は、巻頭の『チエホフの生活』と相俟つて、チエホフを鑑賞し研究する者には決して邪魔なものではあるまいから……》（五頁）とある。

大正一五年七月一八日発行春秋社『チェホフ書簡集』定価二円五〇銭四六判変形箱入りの一九二六年六月二六日と日付のある「訳者の序文」は《この本は数年前、『チエホフの手紙』といふ標題で或る本屋から出し、僅少の部数を売つてそれなりになつてゐた》（三頁）とあり、冒頭からこの文の前までは、春秋社版も改造社版も同文である。これに続いて春秋社の担当者への謝辞があり、そして《糊口の為に種々な仕事をしてゐるものゝ》、この本には特殊の愛着があり、それが甦ったのは特別に嬉しく、数年前と気持ちも考えも異なるので文章は徹底的に直し、ゴリキー『追憶の断片』以外にはチエホフの追憶はブーニンとクープリンが書いているが、後者は写真屋風のつまらないものだが、前者はチエホフの或る一面を捉えていて、《クリミヤか何所かの月の蒼く冴えわたつた深夜の海を背景にその姿を渾然と描き出した、名画のやうな感じのする小品であった》（三頁）が、英訳本を失ってそれを付け加えることができなかったのは残念だと述べている。

小高根は静雄が読んだのは改造文庫といっているが、次のような文章である。

> A・N・プレスチェーイェフへ／三月六日／恐ろしく寒い。然し憐れな小鳥たちは既にロシヤに向つて飛んで来る！小鳥たちは郷愁と祖国の愛に駆られて来るのです。幾百万の小鳥が故郷を恋

ひ慕うて生贄となり、幾らかの小鳥が途中で凍死し、どんな苦悶を彼等が三月及び四月上旬に故郷に帰着するために堪へ忍ぶかを詩人が知つたら、彼等は疾くにその賛歌を詠つたでせうに！……飛ばないで全路を歩いて来る秧鶏（くいな）や、凍死を免れるため人間に身を委ねる雁の身になつて御覧なさい……何とこの世の生活といふものは辛いものでせう！（一一三～一一四頁）。

ガーネット訳の書簡集は一九二〇年にニューヨークのMacmillan社から四一六頁、二三センチメートルの形態と、ロンドンのChatto & Windus社から前付頁一三頁、本体頁四二四頁、二三センチメートルの形態のものが刊行されているということが、英国図書館ウェブ目録と国立情報学研究所Webcat Plusで判明するが、これがどうも初版のようである。筆者の手元には以下の図書がある。

Letters of / Anton Tcheov / to his Family and Friends / TRANSLATED FROM THE RUSSIAN BY / CONSTANCE GARNETT / London / Chatto & Windus / 1920. 形態に関する事項については xiii, 424 p.: 肖像 ; 23 cm で標題紙裏 All rights reserved（/ は改行を意味する、以下同様）とあり、同書五頁には以下のコメントがある。

TRANLATOR'S NOTE / Of the eighteen hundred and ninety letters / of Tchehov published by his family, I have / chosen for translation the letters and pas- / sages from letters which seem to me to / throw most light on his character, his / life, and his opinions. The memoir is / an abridged and adapted version of the / biographical sketch of his brother / Mihail Tchehov. Tchehov's letters / to his wife after his marriage / in 1901 have not so / far been published.

内山の「訳者の序文」はこの部分への言及とみなせる、春秋社（二～三頁）、改造文庫（四～五頁）ともに同じ文章が載せられている。

チエホフは随分沢山の手紙を書いた。それはいまロシヤ語の原本で菊判六巻の浩瀚な集録をなしてゐる。ロシヤ語のできない私のこの訳本は、ガーネットの英訳本に依（改造文庫版では「よ」とひらがな—引用者註）つたのであるが、ガーネット訳が右のロシア原本に依（改造文庫版では「よ」とひらがな—引用者註）つたものか何（改造文庫版では「ど」とひらがな—引用者註）うかは不明であつて、ガーネットはたゞチエホフ家に依（改造文庫版では「よ」とひらがな—引用者註）つて発表された八百九十（ママ）通の書簡のうち、チエホフの性格、生涯、及び意見に光を投ずると思はれる部分を選択渉猟したと云つてゐるだけである。巻頭に掲げた『チエホフの生活』は、チエホフの弟ミハイルの伝記的スケッチを英訳者が翻案省略したものだといふ。それに就いて（改造文庫版では「ついて」とひらがな—引用者註）、ゴッスは『翻案及び省略といふことは危険でもあるし、この部分の仕事は不用意に行はれてゐる、』と云つて難じてゐるが、あれだけ魅力のあるものを、ガーネットも余計なおせつかいをしたものだと思ふ。之も（改造文庫版では「これも」とひらがな—引用者註）、ロシヤ語のできない私はそのまゝガーネットのものを訳すほかなかつたのは残念である。

三月六日付A・N・プレスチェーイェフ宛ガーネット訳は以下の通り（八二頁）。

To A. N. PLESHTCHEYEV. / Moscow, *March* 6. / It is devilishly cold, but the poor birds are already flying to Russia! They are driven by homesickness and love for their native land. If poets knew how many millions of birds fall victims to their

longing and love for their homes, how many of them freeze on the way, what agonies they endure on getting home in March and at the beginning of April, they would have sung their praises long ago!... Put yourself in the place of a corncrake who does not fly but walks all the way, or of a wild goose who gives himself up to man to escape being frozen... Life is hard in this world!

一九九九年から一五巻のチェーホフ全集がモスクワのTeppaから刊行されているらしいが、残念ながら参照できていないのでチェーホフの全書簡が現時点で何通なのか確定できていないが、ソ連邦時代の一九七四年にチェーホフ全集全三〇巻中、書簡一二巻の第一巻（一八七五～一八八六年分）が刊行された。「編集にあたって」によればチェーホフの書簡は一八七五～一九〇四年の二九年間に書かれた約四四〇〇通が保存されているという（А. П. Чехов, “Письма. том первый 1875-1886”, Издательство Наука、五頁）。

Наука版前掲書によると（六頁）、チェーホフの書簡は一九〇九年にモスクワでБ・Н・ボチカレーフの収集によって、一九一〇年には同じくモスクワからヴラジミール・ブレンデル編纂の、一九一二年から一九一六年にかけてМ・П・チェーホワによってモスクワで約二〇〇〇通の六巻が刊行されている。次の刊行は革命へての一九二二年だから内山の記述する《ロシヤ語の原本で菊判六巻の浩瀚な集録》はМ・П・チェーホワのものか。

なお『チエホフの手紙』は現物を参観していないのだが、国立国会図書館NDL-OPACと国立情報学研究所のWebcat Plusのデータによれば、東京の洛陽堂という書店から一九二一（大正一〇）年四月発行で頁付が二、一四、五三六ページ、肖像があり菊判変形である。したがって内山賢次はガーネットを入手するやいなや翻訳に取りかかったとみていい。

一九七五年モスクワで刊行されたチェーホフ書簡集第二巻に収められた三八五通目のA.（алексей）Н.（николаевич）Плещеев（アレクセイ・ニコラエヴィッチ・プレシュェーエフ）宛でチェーホフはまず『大草原』書評、ブレーニンのフェリエトン、オストロフスキーの手紙を読んだことから書き始めている（二一〇～二一一頁）。注解（四五八～六〇頁）からピョートル・ニコラエヴィッチ・オストロフスキーが一八八八年三月四日付の大部な書簡で『大草原』の読後感に言及し、チェーホフから《ロシヤのすばらしい長編（ロマン）》が生まれることを期待していると書いたという。

オストロフスキーが現役を退くことへの懸念をプレシュェーエフへ打ち明け、プレシュェーエフの健康を慮り、《メレシュコフスキーに対するブレーニンの批評に照らして判断すると、貴方は氷点下一五～二〇度の中にいる》（二一一頁）と書いて、《恐ろしく寒い》と続く。ここでチェーホフはプレシュェーエフを〝飛ばずに全路を歩いて来る秧鶏〟になぞらえている。その原文は次の通りである。

Если судить по критике Буренина о Мережковском, то у Вас теперь 15-20° мороза... Холодно чертовски, а ведь бедные птицы уже летят в Россию! Их гонят тоска по родине и любовь к отечеству; если бы поэты знали, сколько миллионов птиц делаются жертвою тоски и любви к родным местам, сколько их мерзнет на пути, сколько мук претерпевают они в марте и в начале апреля, прибыв на родину, то давно бы воспели их... Войдите Вы в положение коростеля, который всю дорогу не летит, а идет пешком, или дикого гуся, отдающегося живьем в руки человека, чтобы только не замерзнуть... Тяжело жить на этом свете!

メレシュコフスキーに対するブレーニンの批評に照らして判断すると、貴方は氷点下一五～二〇度の中におられます。恐ろしく

寒い。にもかかわらず憐れな鳥たちもすでにロシアに飛んで行きます。かれらを郷愁と祖国愛が駆り立てるのです――幾百万もの鳥たちが生地への愛執から犠牲になるということを、途中でかれがどれだけ凍死し、かれらが三月や四月のはじめに、故郷に行き着くために、どれだけの苦痛に堪えているかを、もし詩人が知ったら、とっくの昔に詩歌で賛美したでしょうに……道中を飛ばずに、徒歩で行くウズラクイナあるいは凍死だけはしないように、人間の手に生きたまま身をゆだねる雁の立場になってごらんなさい……この世で生きることは耐え難いものです！

ロシア語に〝小鳥〟は птичка だし、“bird”も小鳥でなくてもよさそうだが、辞書の字義通りに訳してみると、内山賢次訳は格調の高さを感じさせるが、本村敏雄は《飛翔力を持つ渡り鳥たちが勇敢な冒険者であり、彼らの追うものが夢と理想であるとすれば、飛翔できない秧鶏は、私たち地上の人間そのままであって、彼の背負っているのは、自分たちを緊縛する過去と、それにつながる現在の日常》と考えると、チェーホフは飛翔力のない秧鶏への憐憫も忘れていないが、伊東静雄はチェーホフと違って居直っていると鑑賞する（『秧鶏の旅』ゆまに書房、平六、三四〇頁）。

昭和四年一二月一一日　チエーホフの全集（独逸語）をとりよせて読みたいと『書簡』にあるが、チェーホフの次のことばにも親しんだろうか？

鷲はめんどりよりも
低くおりることもあるけれど
しかしめんどりはけっして
雲まで昇ることはない……
（チェーホフ作、湯浅芳子訳『退屈な話・六号病室』岩波文庫、昭三八、七〇頁）

この一節が語たるものは静雄の「静かなクセニエ（わが友の独白）」のテーマでもあった。

四

『書簡』（四七頁）大正一四年一〇月五日付封書に、《近頃僕が読んだ本を二三書いておくから、君も暇があつたら好きなのを読んでみたまへ、／ジツケンスの『クリスマス・カロル』／森鷗外『舞姫』／桑木厳翼　哲学概論／岩城準　明治大正の国文学／白村　十字街道を行く／等だ》とある。大塚格をはじめ、知友への書簡に報知された読書リストは、彼らに自己の知的空間、知的風土を共有してほしいとの意思表示とも受け取れるが、これらのリストは静雄の詩的営為を註解する糸口になる。そこでこの節では『哲学概論』、『明治大正の国文学』、『十字街頭を往く』を解題してみたい。

手元の桑木厳翼『哲学概論』は奥付が早稲田大学出版部、大正一〇年六月廿五日発行、全部改訂新版、改正定価金二円となっている。二、三、三、四、五六五頁、一八センチ。標題紙は文学博士桑木厳翼著『改訂哲学概論』早稲田大学出版部蔵版となっている。

書誌来歴は本書に付された明治三三年八月付「緒言」によれば、東京専門学校文学科三一年度講義録を三二年に増訂し刊行、（これは早稲田叢書として明治三三年一二月に発兌したようだ、Webcat Plus による―引用者註）、さらに付された「哲学概論改版序」（大正三年一二月）に《今此改版に当つてもたゞ字句、人名の発音等に少許の変更を施し、間々註を附したるのみ》とあり、「哲学概論再改版序」（大正一五年一月）では、《今改版を公けにするに当て単に字句の修正に従へり。其の理由に至つては嘗て初めて縮刷改版（縮刷改版は大正四年発兌、Webcat Plus による―引用者註）を試みし時に序文として記したる所と異ならず。就中、大正一三年三月の新版に於て付記したる増補は、余の現時の所説を示したるものとして、特に読者の一粲を博

せんことを欲するものなり。而して此新改版に於ては別に支那論理に関する旧稿を加へて之を附録第七章とせり》と記述されている。したがって手元の書物は大正一〇年六月廿五日発行となっているが、大正一五年六月のものらしい。静雄はどれを参観したか？いずれにしろ本書が桑木の大学における哲学概論の講義ノートから発展したことが確認できる。

構成は「哲学概論再改版序」、「哲学概論改版序」、「緒言」、「哲学概論目次」、「第一章　序論」、「第二章　哲学の定義」、「第三章　哲学の淵源」、「第四章　哲学の形態」、「第五章　哲学の問題（一）知識哲学」、「第六章　哲学の問題（二）自然哲学」、「第七章　哲学の問題（三）人生哲学」、「附録」、「増補」。

右に見たように講義ノートの第二章は「哲学の定義」に当てられているが、ここでは哲学と詩歌宗教との区別、哲学と科学詩歌との同異が考察されている。

抑も広義に所謂詩歌は人が天地自然の風景若しくは人事の曲折波瀾等に就て感想経験せる所を美妙に（散文若しくは韻律に従ひて）叙述したるものにして、通常其中に叙事、抒情、劇詩の三種を区別すること、洽く人の知る所なり。其中特に第二の抒情詩は主として作者の感慨を述べたるものにして、一路直視、驀地に詩人の人生世界に対する観念を吐露するもの多く、其思想の幽玄深邃なる、優に大哲人の経営辛苦して案出せるものと符合することあり。蓋し哲学の攻究事項の何たるは後に至りて詳述すべきが、今仮に前章に於て略記したる所を更に繰返せば、哲学とは世界全体の原理を論究する学なりと概言するを得べきが故に、其論究の目的に於ては毫も詩歌と異なる所あらざるなり（六〇頁）。

《西行芭蕉の歌俳を諷誦すれば諸行無常有為転変の世相》を見ることができ、《バイロン、ハイネの遺吟に厭世の哲理を覚り、シルレル、ゲーテに高潔なる理想を》感得することができる。特に、シルレルのような詩歌の目的は人生を描写することで、アーノルドの詩歌は人生の批評ということができる。詩歌の範囲は全く人生に関する哲学と同一であるということができる。したがって古代には詩歌と哲学とはたびたび区別されず、《哲学にして詩歌の形（即韻律）を借りて説かるゝものあり、詩歌にして全く哲学を陳述するものあり》（六一頁）。

その他、単に詩歌の外形のみならず、哲学にして同時に詩歌の精髄を含むもの、つまり文章のことばが燦然として、これを読んだ者を《幽玄の理説を解せしむると共に雅興、美妙の感情を起さしむるもの》が多い。ギリシャで最も有名なのはプラトーンの対話編で、中国では《荘子の汪洋たる、哲学とも称すべく又実に散文的詩歌と称するも不可なし》（六一頁）。

父親から大学進学を断念するように言及され、級友からは国文科進学を嘲笑されている静雄にはこれらの記述は大きな勇気を与えるものであったのではないかと筆者は想像する。

静雄の詩学に宗教観がどのような作用をおよぼしたかは筆者の中で手付かずになっているのだが、桑木の左の言述あたりからヒントが引き出せるかも知れない。

宗派争いの宗教ではなく、自己より偉大なものへの渇仰の情念から生ずる精神的産物、すなわち宗教家が安心立命の地に到達せんがための指針である説教は幽玄な哲学と符合し、仏教の無常論、唯心論は近世の哲学思想と肩をならべ、キリストの教説は人生哲学の妙理をついているとする（六二～六三頁）。

岩城準太郎著『明治大正の国文学』成象堂、大正一四年六月五日発行、二円五〇銭、四、一〇、二九五頁、二〇センチ、箱入り。小口が江戸紫、表紙は布装で花にとまる蝶が描かれ、花と蝶の一部に金泥がほどこされたきれいなもである。

構成は「凡例」、「目次」、「一　少年の日（序に代へる）」、「二　新文学建設の主張」、「三　西洋文学の影響」、「四　詩歌革新の運動」、

「五　新体詩界の曙色」、「六　小説界の進境」、「七　狂飈時代」、「八　近代文学の樹立」、「九　新興の文学」、「一〇　口語体文章の創始」、「一一　口語体文章の発達」、「一二　劇壇の黎明」、「一三　劇壇の啓蒙」、「一四　青年の文学から壮年の文学へ」、「一五　近代文学の一生面」、「一六　人生肯定の文学」、「一七　暗示の文学と理想主義の文学」、「一八　人間味の文学」、「一九　開拓者の悲劇（跋に代へる）」。

有為の青年は天下国家に労すべきで小説など書くべきではないという当時、文学士である坪内逍遥が小説を書いたという指摘（二六頁）や、樋口一葉が《針仕事に夜を更かし、生業の苦心に夜を明かしても尚ほ読書を怠らず、図書館通ひを止めず、偏に文学のため創作のために努めた》（六八頁）という一文は静雄を奮励させただろう。また二葉亭四迷の訳したツルゲーネフ『父と子』は《苟も文学に携る青年の中で、心あるものはこれに心を引かれずにはゐられなかつた》（三三頁）は伊東静雄を刺激し、昭和四年一二月二一日にはそのドイツ語訳に挑戦し、「父と子」の表記がドイツ語で複数なのは神経にさわっていかんという。

岩城は明治三四、五年頃以後の国文学は政治経済、教育宗教、労働問題、人口問題、外交や戦争と同様に実際的な意味を持つようになったと記述するが（一〇五頁）、それは一部のインテリゲンツィアの仲間内だけで、一般大衆は相変わらず一読了解の三文小説に顔が向いていたのではないか。

「四　詩歌革新の運動」は正岡子規の俳句・短歌革新の事績にまるまる割かれている。《とにかく新体詩の出現は短歌俳句に対する信認の動揺を示すものである》、《青年文学者が此の方面に目覚めたなら、短歌俳句は依然日本詩歌の精粋として詩界の大きな分野を占めるわけである》（三七頁）、《芭蕉雑談と題する新しい研究がある。これが即ち俳句革新の暁鐘であつて、今まで現はるべくして未だ現はれなかつた詩歌の世界の新声である》（三八頁）、《比較研究は斯道に眼を開かせ悟入を導く。芭蕉翁の研究はその真相の闡明であつて、又その真価の発揮である。子規は従来の俳界に伝統的に唱へられてゐる芭蕉翁観を全然棄却した。芭蕉の作品に対する評価には全く新しい初生な眼を用ひた》（三九頁）。

静雄の学部卒業論文に岩城の「四　詩歌革新の運動」のこれらの文章の痕跡を求めることはできないが、子規への関心に一役買った可能性はある。

《二十世紀の文化は国境の別を破つてゐる。孤立して他国に交渉のない文化現象は、少くとも開明の国には見られない。明治大正の国文学は世界の文学と密接な交渉をもつてゐるので、日本だけを切離して国文学を説くといふことは、不可能の事になつた》（一〇四頁）と岩城は語るが、それは静雄をして《我々の運命は決局観察人にすぎないらしい。私には十九世紀の末期から、今世紀の黎明へかけての世界のうつりかはりは、実に興味にみちた「人生喜劇」だ。私の前にハストリンドヘルヒ、ボードレル、ハウプトマン、ツルゲニエフ、ゴーゴリ、ゴーリキー等の一列が、通過しつゝある。私は私自身の内部生活の推移に沿ふて、これ等の人々の理解に努力したいと思つてゐる。／それから後だ、私が国文学者になるのは。／その時を期待してゐてほしい》（『書簡』、一七八頁）と言わしめる。

静雄が「十字街道を行く」と大塚格に書き送っている、厨川白村『十字街頭を往く』は大正一二年一二月一〇日福永書店から二円五〇銭で刊行された。二〇センチ、箱入り、天と見返しはきれいな青緑で染色されている。図版として著者肖像、絶筆原稿（「人間賛美」の冒頭、『週刊朝日』のために起稿した）、「序」、目次、四、三八二頁、人間賛美が三一頁、阪倉篤太郎の「跋文」一〇頁、「跋文」から著者厨川白村辰夫は関東大震災の犠牲になったことがわかる。手元の書物は大正一三年一月七日廿六版となっており、一三、一七、二〇、二三、三一頁に伏字がある。初版に伏字があったかどうか確認がとれていない。

煩を厭わずに目次を列挙しよう、「悪魔の宗教」、「僧正イングその

ほか」、「文芸上のリアリズム」、「文芸と性欲」、「再び民衆の手に」、「演劇と観客」、「西洋の「蛇性の婬」」、「強ひられたる文明」、「有嶋さんの最後」、「恋愛と結婚のこと」、「オオプン・フォーラム」、「何が故の侮蔑ぞ」、「東西の自然詩観」、「裸体美術の問題」、「西班牙劇壇の将星」、「ゴルスワアジイの劇論（本文の章見出しは「一六、ゴルスワアジイの劇」となっている―引用者註）」、「ダンセイニの邦訳と新作」、「作家の外遊」、「宗教と迷信」、「冷嘲熱罵」、「婦人と読書」、「服装の堕落」、「小泉先生の旧居を訪ふ」、「詩人クロウデル」。

おそらく経済的余裕のなかった静雄は高等学校の図書館（室）で立ち読みした目次に惹かれたにちがいない、とくに「有嶋さんの最後」。《『人妻と道ならぬ恋をして情死した。』／それに違ひなからう。しかし話は、そんなに簡単ではないのである。人生そのものが簡単でないが如く》（一六四頁）。《生きる事は戦ひだ。また生きんが為にこそ吾等は戦つてゐる。その戦ひの休みなき連続が人生だ。恋愛は即ち烈しく血みどろになつて戦ふ事ではないか》（一六五頁）ということばに〝愛と真との根底の上にたちさへすればいゝ〟と大塚格に書き送る静雄に共鳴したにちがいない。

「悪魔の宗教」では経典と武器、宗教と征服は歴史上の事実として実は兄弟分で、寺院の法要と銀行通帳が、説教僧と婦女姦淫とが付き物と同様（三頁）だと分析する白村の文章に人生の表裏を教えられ、「帰郷者」の発想に結実した？

筑紫野の一角で読書と並行して深く黙思し詩作に耽った静雄は、真実を求めるために善と美の世界にあこがれ、いわゆる真善美を模索して苦悩した。それはときに恋の取捨に迷う若者の苦悩であり、神は人間を幸福になれと創造したのだからと、愛と真との根底にたって人間らしく生きることを希求した。春機発動期に打ち負かされそうになりながら、孤独に徹しきれぬ若者の悲劇を内面生活として、荒んだ心を静めてくれる花をもとめて筑紫野を彷徨し、精神的負荷の危機を読書で克服し、心と魂の支柱を『わがひとに与ふる哀歌』に結晶させていった。

さらに苦悶の青春期は読書を通して、《わがひとのかなしき声をまねぶ……／（行つて　お前のその憂愁の深さのほどに／明るくかし処（こ）を彩れ）と》という文学的解脱へ向うための静雄のモラトリアム期間でもあった。だがモラトリアムの先に内なる自己との壮絶ともいえる戦い、つまり〝秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る〟ことを自己に強制する詩人としての試練が待っていることを予想できていただろうか？